詠む広場

毎日俳壇

井上　康明　選

深き音してどんぐりの落ちにけり　宇陀市　泉尾　武則

△評▽深き音とは、作者が捉えたどんぐりの落ちる一瞬の音である。秋の深まる時節であることも、想像されるだろう。

大鯉の身を任せたる秋の川　朝倉市　鳥井てんせき

△評▽秋の川は、澄んで豊かに流れている。大ゴイもゆったりと泳いでいることだろう。

妻の箸眠る箸箱長き夜　高松市　島田　章平

冬めくやみづうみの透きとほるまで　雲南市　熱田　俊月

初冬や北岳こゆるちぎれ雲　甲府市　清水　輝子

見上げれば雲三三片林檎園　湖西市　宮司　孝男

合格のメール着信小春風　東　京　永井　和子

冬晴やひかりの芯の揺るぎなし　川越市　岡部　申之

天上に寒気地上に鼓笛隊　川越市　峰尾　雅彦

地車の轍残して秋暮るる　東大阪市　山尾サトミ

片山由美子　選

木犀の香に明けて香に暮れにけり　羽生市　今成　公江

△評▽まっさきにモクセイの香りに気づいた心地よい朝。そして夕方ほっとしたときにまたその香りが。心安らぐ数日間が続く季節。

金木犀路地を曲れば銀木犀　横浜市　延沢　好子

△評▽キンモクセイほどの強い香りではないが、白い花のギンモクセイは視覚的な美しさがある。

これからは独り棺へ栗御飯　千葉市　斉藤まち子

茶筅工房裏に一連吊し柿　奈良市　梅本　幸子

向きあへばコスモスのみな頷きぬ　和歌山市　藤池　芳子

小半日庭の手入れを冬うらら　千葉市　高橋　信子

病院へ行く径草の花踏まず　和歌山市　宮本　啓子

笛の音に大蛇のけはひ里神楽　八街市　山本　淑夫

手のひらで集めて終はる落葉掻　北本市　萩原　行博

バザールの手書きのポップ枯木星　川越市　大野宥之介

小川　軽舟　選

残りゐし客も帰りし夜寒かな　岸和田市　妙中　正

△評▽閉店時間の迫った居酒屋か。粘って飲んでいた客も帰り、夜寒を感じるほど静まった。そろそろ引き揚げるとするか。

早暁に客船着ける秋気かな　東久留米市　小山　博子

△評▽空の白みはじめた港に客船が着く。ふ頭から見上げると秋気が身にしみるようだ。

秋の雨東京駅に顔あふれ　東　京　茂田野マイ子

オムレツとコーヒー秋の雨の朝　行田市　荻原　義久

車座に一升瓶の今年酒　さいたま市　関根　道豊

沈む日に案山子担げば影二つ　岡山市　和田　大義

団栗が団栗を追ふ谷の中　狭山市　小俣　敦美

朝寒や珈琲ミルの重き音　郡山市　寺田　秀雄

コンビニがやうやく村に誘蛾燈　仙台市　鎌田　傑

有明の月の下なる始発駅　高山市　直井　照男

西村　和子　選

爽やかや娘の忠告にしたがひて　川口市　高橋さだ子

△評▽時候の季語が心境をも表している。我が子の忠告に従うとは、我が身の老いを受け入れることでもある、人生の感慨。

ゆきずりの紅葉にバスを降りにけり　東広島市　福岡　宏

△評▽紅葉の美を発見した心躍りが伝わってくる。句ごころが生まれるのもこんな折だ。

新米を夫にふんはり吾にふはり　名古屋市　井上美保子

食パンは厚く切りたし秋日和　津　市　渡邊　健治

朝の浜まつたき秋のきたりけり　神奈川　中島やさか

たちまちにぬるむ番茶や秋の雨　東　京　野上　卓

銅像が喋りだしさう秋うらら　白井市　毘舎利道弘

古街のここも空き家よ金木犀　郡山市　井上　博

小鳥来る父の小さな将棋盤　東　京　徳原　伸吉

聞こえくる妻のソロバン夜の長き　那須塩原市　谷口　弘

新刊

＜句集＞

◇杉山久子『栞（しおり）』　第4句集。刊行直前に師をうしなった中での叙情のあり方がたしかな一冊。平明な言葉による発見が快い。△冬星につなぎとめたき小舟あり▽△いちめんの雪いちめんの若き星▽△聖樹の灯人待つ人を照らしをり▽など注目作多数。（朔出版・2860円）

◇本井英『守（も）る』　第6句集。過酷な闘病生活の中での季題への健やかな思いが光る。△箱庭の船頭口を開けたまま▽△忍冬（にんどう）の花鮮（あた）らしや紅はしり▽△充電のごとく冬日に身をさらし▽（ふらんす堂・3080円）

◇染谷秀雄『息災』　第3句集。師を続けて2人失った後の句集であり、季語のていねいな扱いが印象的。△柴漬（ふしづけ）を仕掛けて朝の戻り舟▽△庭中のもの華やかに端午かな▽△その上に花びらのせて桜餅▽（本阿弥書店・3080円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇三枝昂之『佐佐木信綱と短歌の百年』　国文学者であり、歌誌「心の花」を創刊した歌人信綱。多くの参考文献をもとに信綱を実証的に論考して、短歌の100年を奥深くとらえる。特に圧巻なのは「和歌革新」「大戦前夜の信綱」「信綱の敗戦」についての章である。△願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとはばや▽（角川書店・3300円）

◇沢口芙美『変若（おち）かへる』　総合誌「短歌研究」の連載作品を含む638首を収録。兄や姉の死により、さらにいのちへの思いを深めた第7歌集。△ここよここ私の場所は父祖の地に立てばいきいきと血さへめぐれる▽（短歌研究社・2750円）

◇三枝むつみ『ひかりの作法』　2011年から23年までの作品を収めた第2歌集。詩的で柔らかな陰影を感じさせる詠みぶりである。△薄紙をほのかに透けるは江戸切子　長く待ちぬし光かしれず▽（角川書店・2860円）

（歌人・中川佐和子）